

現代のホメロスに訊く

——中国キルギス族の語り手ジュсп・ママイ訪問談——

アディル・ジュマトゥルディ著

西脇隆夫訳

訳者まえがき

この訳文は、アディル・ジュマトゥルディ(阿地里・居瑪吐爾地)著「居素普・瑪瑪依史詩観」を訳出した。この漢語訳文は、『《瑪納斯》史詩歌手研究』(民族出版社 2006年) 217~240頁及び『口頭伝説与英雄史詩』(中央民族大学出版社 2009年) 313~334頁に収められている。また、そのキルギス語原文は最初にキルギス語版雑誌「クズルス文学」2002年第2期に掲載され、後に『《瑪納斯》演唱大師居素普・瑪瑪依』(民族出版社 2007年) 225~246頁に収められている。

原著者のアディル・ジュマトゥルディ氏によれば、このインタビューは2001年8月26日にアクトゥ県にあるジュсп・ママイの自宅で行われたとのことである。

ジュсп・ママイ(居素普・瑪瑪依 1918~)は、中国キルギス族の大マナスチ(英雄叙事詩「マナス」の語り手を指す一訳者注)としてよく知られている。その経歴と業績については、阿地里・居瑪吐爾地、托汗・依莎克著『居素普・瑪瑪依評伝』(内蒙古大学出版社 2002年)で知ることができる。また、訳者も以下の訳文ですでに紹介している。

1. 「マナス」の語り手ジュсп・ママイ(上)

「名古屋学院大学論集(人文・自然科学篇)」

Vol. 36 No. 1

2. 「マナス」の語り手ジュсп・ママイ(下)

「名古屋学院大学論集(人文・自然科学篇)」Vol. 36 No. 2

アディル・ジュマトゥルディ氏は、キルギス族の研究者であり、現在は中国社会科学院民族文学研究所の研究員を務めている。その略歴については、やはり上記の訳文と下記の訳文で紹介した。

英雄叙事詩「マナス」の特色

「名古屋学院大学論集(人文・自然科学篇)」Vol. 47 No. 1 (2012.1.15)

アディル・ジュマトゥルディ(以下アと略す)ご老人、キルギス族の英雄叙事詩「マナス」はあなたが吟唱したものを記録し、今ではもう出版されましたね。私が今日あなたにお訊きしたい最初の質問は、この質問は以前にもお尋ねしましたが、英雄叙事詩「マナス」はどのようにしてこれほど長い時間キルギス人のあいだで保たれることができたのでしょうか。これについて、どう考えられますか？

ジュсп・ママイ(以下ジュと略す) ああ。これは簡単に複雑、しかも十分に深刻で、有意義な質問だ。ある人は、キルギス人の中では7歳から70歳の者まで「マナス」を知らない人はいないと言われている。過去一千年以上の年月に、キルギス人は異民族にひどい目に遭わされた。とりわけ、カルマック人はマナスがまも

なく生まれると耳にすると、すべての妊婦の腹を切り裂いてマナスが生まれる前に殺そうとした。このことは歴史にも記載されている。後に、マナスは無事にこの世に現れ、平等な権利を奪回し、タラスに自分の都を作った。その時から現在まで、カルマック人のそれらの行為はキルギス人の心中にぬぐえない傷跡を残し、口から耳に伝わり、永遠にキルギス人の記憶に留まっている。聞いたことがない者は聞いたことのある者から聞き、知らない者は知っている者から知り、あるものは増え、あるものは減り、ずっと今日まで伝えられてきたのだ。

ア そうですね、英雄叙事詩「マナス」の中では人の真情が詠われ、英雄の勇氣、故郷の美しさ、人びとの友情が詠われていますね。これらはすべて人びとが喜ぶ内容かもしれません。

ジュ もちろん、これらもそれぞれの魅力と価値がある。長いあいだ、圧迫され、自分の女さえも守れなかった人びとは、自由を手に入れ、軍馬に跨って敵と闘うことができるなら、容易に得られない自由をきっとたたえるであろう。自分たちの勇士と利口で器用な、美しい娘をたたえ、賢明な人をたたえ、特にマナスとその忠実な伴侶カニケイをたたえている。これはなぜだろうか？ カニケイは管理、組織、軍事の面でマナスと対等にふるまっているからだろう。他に、マナスの子セメテイの妻アイチュレクも特別にたたえられている。ここには、二つの要素があると思う。アイチュレクは空を飛ぶことができる。これは本当だろうか、それとも嘘だろうか？ わしらは本当のことだと語っている。けれども、これも人びとの内心の願望にすぎないかもしれないし、このような美しい願望は、アーケンたちの伝承では本当のように映っているのかもしれない¹⁾。

ア 「マナス」の中でたたえられている英雄

たちは多く、特にマナス、アルマンベト、バカイ、ギョルチョロは目立っていますね²⁾。

ジュ そう。彼らについて言えば、オロズドゥの十人の息子はカルマック人によって各地に追われてから、バカイはキルギス人の団結と統一に対し、マナスの成長に対し、大きな貢献をした³⁾。しかし、叙事詩の中ではバカイがバカの息子だと語っているだけで、これまでその父親については語っていなかった。キルギスタンの「マナス」の中でもそうだ。わしらは彼の父親が誰か知らず、彼は叙事詩の中で死なずに今日までずっと生きている五人の聖人の一人だと思っている。

ア 私たちはどうしてバカイをこのように高く評価しているのですか？ 彼の最大の貢献は何ですか？

ジュ 彼は生涯忠誠心に燃え、キルギス人のために苦勞し、マナスからその孫子まで、ずっと彼らのそばに付き添い、補佐し、最後には他の四人とともにこの世から消えた。この五人に対して、わしらはこれまで死んだとは語らなかった。

ア どうして？

ジュ 彼らはキルギスのため特別な貢献をしたからだ。

ア 五人とはどの人たちですか？

ジュ バカイ、セメテイ、カニケイ⁴⁾、アイチュレク⁵⁾、ギョルチョロ⁶⁾。

ア 彼らはいったいどんな貢献をしたのですか？

ジュ バカイについては、わしらはもうかなり話したが、さらに言えば、セメテイの時代に、キルギスの中に裏切り者が出て、バカイは権力を奪われ、セメテイは陥れられた。ギョルチョロの肩甲骨は抉られた。年が八十すぎのバカイは徒歩でラクダを追うように強いられた。彼ら

はこのような迫害に遭ってもキルギスを裏切らず、マナスの子孫に背かなかった。彼らが追求したのは公正、自由だった。このため、わしらはバカイを忘れることはできない。

セメテイについて言えば、わしらは「マナスの子セメテイ、頭に戴くのはミンクの帽子」という詩句で彼を描く。セメテイはその父マナスのように軍隊を率いて大規模な闘いをするとはなかった。彼は一度だけ大きな闘いをしたが、二度あるいは三度ということとはなかった。大部分の時間、彼は自分の二人の仲間、アルマンベトの息子ギュルチョロとチュバクの息子カンチョロを連れて、強敵を負かした⁷⁾。特にマナスの死後、五つの氏族の五人の首領、コングルバイ、ネスカラ、ムラディル、ウサンゲン、ウサンらは兵を率いてキルギスに侵略し、タラスを包囲し、彼は側近のカンチョロ（勇士）二人だけで敵を負かした。コングルバイ一人だけが逃げた。セメテイのこのような英雄的な心意気と、故郷を守る勇気は称賛するに値しよう。彼の父親マナスはベイジンまで遠征し、アラニク城を占領し、大軍を率いてあちらこちらで闘ったが、その側近の勇士四十人は最後に敵の手でやはり死んでしまった⁸⁾。セメテイには勇士二人しかいなかったし、バカイのような策士もいなかった。しかし、彼の勇士ギュルチョロはバカイに劣らなかった。その業績は今まで伝えられている。

わしらはなぜギュルチョロをたたえるのだろうか？ それには二つの理由がある。ギュルチョロの父親アルマンベトはマナス軍の統帥であり、マナスの一生の友であった。彼はキタイ人だったけれども、カルマック人に迫害されてマナスを頼った⁹⁾。ある人が言うように、宗教のためではない。カルマック人がアルマンベトの故郷を占領したために、彼はやむなく逃

げ出したのだが、後にイスラムを信仰する人びとが彼はイスラムに帰依するために来たと言って、わざと宗教方面の原因を強調し、彼を敬虔なイスラム教徒として描いたのだ。私自身はムスリムだが、指摘したいのは、アルマンベトは確かに正義を求めて来たということだ。チュバクと彼は矛盾を起し争ってから、チュバクは自らが地元の民族の人だと思って、彼の面前で道理をわきまえず、無礼尊大で、傲慢だった。たとえこうでも、アルマンベトもキルギス人に背かず、傷ついたマナスを護送し、死ぬ前にキルギスまで送り届けた。彼はセレクに忠告し、敵の手で殺されたセルガクの遺体を救ってその故郷まで連れもどした¹⁰⁾。これらは、ジョモク（叙事詩）の中ですっかり詳しく話されている¹¹⁾。とりわけこの偉大なジョモクがこの世に残されることができたのには、アルマンベトの貢献も大きかった。

戦争の最後の日に、彼はウラマンの子ウルチウールに詳しく話した¹²⁾。

「バカイ、傷ついたマナス、ウルチウールは残れ。おまえは初めからマナスのそばに付き添っていた。クルグルチャルがおまえを連れて来てから、おまえはウラマンの子ウルチウールの名を得た¹³⁾。自分の目で見えたマナスの功績を大げさに言うな、脱落してもいけない。英雄マナスの業績をこの世で伝えて広めるのだ！」

キルギスの歴史が伝えられたのは、アルマンベトの導きや激励と切り離すことはできない。彼の陰日向なくおおらかなこと、抜きんでの知恵を、わしらは忘れることはできず、賛歌で彼をたたえている。彼を尊敬するために、人びとはイスラムの「スルタン」の名を与えたほどだ。「スルタン」とは、イスラムの教えを自ら進んで信仰する人を指している。

彼の息子ギュルチョロはキタイの女が生ん

だ。わしが自分で聞いて語っているように、アルマンベトがコングルバイと領土を争い¹⁴⁾、それからそこを離れた時に、エセンカンの時代に12～13歳の娘だったビルメスカルはアルマンベトにこう言った¹⁵⁾。

「あなたがもしも出て行かないなら、よそに身を寄せるのはもうできません。彼と敵対するのなら、破滅の道しかありません。私はあなたを40年まちましょう」。

確かに、40年後に、アルマンベトが再びもどって来た時、キタイ人はマナスに破れて、エセンカンの娘ビルメスカルとアイジャンジュンの娘ブルルチャをキルギス人に献じた。その時、聖人コシャイの一存でキタイの首領の娘たち二人をマナスの最も親密な仲間であるアルマンベトとチュバクに嫁がせた。後に、この二人の女がギョルチョロとカンチョロを生んだ。ギョルチョロはアルマンベトの妻ビルメスカルが生子、カンチョロはチュバクの妻ブルルチャが生子だ。

では、どうして一人をギョルチョロと名づけ、もう一人をカンチョロと名づけたのか？ 二人の女が身ごもってから、マナスは「テントの覆いのように大きなフェルトの帽子をかぶっている奴隷」と言われたノイグート部落の勇士に彼女たちを故郷まで護送させた。道のりが遠かったため、彼女たちは途中で同時に出産した。おそらくイシク湖の北側のウラル地方であろう。彼らはすぐにカニケイに来てもらった。ビルメスカルとブルルチャは宮中で育て、か弱いお姫さまだったため、出産の苦痛に耐えられず、子どもを生むと二人とも死んでしまったからだ。カニケイは自分の乳房を二人の子の口にくわえさせた。この時、カンチョロがくわえた乳房から血が流れ、ギョルチョロがくわえた乳房から真っ白な乳が流れた。そこで、カニケイは

この二人の子に「カン(血)」と「ギョル(花)」と名づけた。後に、この二人が成人に成長してセメテイのためチョロ(勇士)となつてから、彼らは「ギョルチョロ」と「カンチョロ」と呼ばれるようになった。「チョロ」とは、キルギス語では「仲間」の意味なのだ。

ギョルチョロは父のアルマンベトの道に沿って、勇士となり、セメテイを襲った数多の強敵に勝った。例えば、青色の雄牛に乗った一つ目の巨人マドハンに勝った。しかし、そうであっても功績を鼻にかけ傲慢にならなかった。彼は肩甲骨をカンチョロとクヤズに挟まれ、体を損なった時でも、キルギスに背くことはなかった。そのうえ、彼はアイチュレクと相談して、はかりごとを企み、アイチュレクがセメテイの遺児をお腹に保って三年後に生むようにした。マナスの家族の血を残すことで、彼の貢献は大きかった。どのように困難であっても、ギョルチョロはマナスの子孫に背くことがなかった。キルギス人は彼の真情、気高さ、品行を高く評価し、その父アルマンベトと同じようにほめた。たえ、時にはより高くたたえたほどである。このため、誰も彼が死んだとは言いたがらず、まだこの世に生きていると思っている。

ア この世から隠れて死んでいないと言われる、その五人の中には三人が男で、もう二人は女ですね？

ジュ そう、ギョルチョロの状況は今しがた言ったとおりだ。カニケイは全力でマナスを助け、心と心が通じ合っていた。マナスの死後、カニケイは他の女性とは違って他人に嫁がなかった。徒歩で息子を背負って、しゅうとめを助けながらつらい目にあい、実家に身を寄せると、セメテイが成長してからまたもどった。カンチョロが裏切ってから、いっそう苦しめられた。彼らは彼女にヨーグルトさえも飲ませ

ず、服も着させないで、半裸で子牛を放牧させた。十分に辱められたけれども、彼女は個人の恨みを考えなかった。マナスの魂に守られ、彼女の苦労は無駄にならず、孫のセイテクが成人し、ギュルチョロの肩甲骨も回復すると、その願いは実現し、尊厳と権力を奪い返した。彼女は「わが息子がもどってくるかもしれない」という願いを持って、駿馬タイトルを競馬に参加させた。これらすべてのことは、バカイの提案を受け入れて行なった。

アイチュレクについて言えば、彼女はカイクチャルという人と仙女が生んだ子どもだった。カイクチャルはたくさんの子どもを生んだが、シュクシュルという巨人が彼らの生まれたばかりの子を奪い取っていった。後に、アイチュレクが生まれた時、子どもを守るために、カイクチャルは生まれたばかりの子犬を妻の懷に入れ、アイチュレクを白鳥の羽でくるんで荒野に置いておいた。アクンカンが狩りでそこを通りすぎると、野ヤギが女の赤子を育てているのを目にして、野ヤギを放って、赤子を抱いて家にもどった。それは雌鹿という人もいる。キルギス人は鹿を崇拜し、鹿を聖なるものと見なしているのは、このことと関係している。わしが「マナス」を吟唱する時、これらのことをはっきり述べていない。わしが当時はっきりと述べていたら、キルギス人の鹿を崇拜する習慣がもっとはっきりしたかもしれない。

ア 上述の五人は死んでいないと言います。では、人びとが崇敬するマナス、アルマンベト、チュバク及びその他多くの英雄はどうして死んだのですか？

ジュ わしらは確かに彼らが死んだと言うべきではない。しかし、それではだめだ。そうすれば正しくないと、人びとも思うだろう。あんた自身でも考えてごらん。もしもマナスが今日

まで死ななかったなら、人びとはどうしてそんな兆しがないのだと問うだろう？ もしもわしらがマナス、アルマンベト、チュバク、スルガクが死ななかったら、どうして人びとに信じてもらえるだろうか？ 確かにそう言うことはできない。

ア それは昔から今までそう語ってきたのですか？

ジュ そうだ。昔から今まで、そのように語ってきた。これもマナスチの習わしだ。わしらはこのように伝えなければいけない。

ア あの五人が隠れ、他の人は死んだと語るの、長いあいだの伝統でしょうか？

ジュ そうだね。

ア しかし、叙事詩及び現実の中では、人びとはマナスの魂がまだ生きています。セメテイ及びマナスの子孫が危険に遭遇した時、マナスの靈魂によって彼らは危機を脱します。私たちは日常生活の中でも「どうかマナスの魂よ、ご加護あれ」としばしば言って、このような言葉で自分や他の人を慰めます。

ジュ マナスの子孫はいつもマナスの靈魂による加護を求める。「マナス」の中では、マナスの魂による加護を祈る時、マナスは自分の勇士を連れて出現すると述べ、彼らが来臨しているとも語っている。キルギス人は最も危険で、困難な瀬戸際、分かれ目にマナスの魂に祈る以外にどうしようもない。今日、私たちもマナスの魂に祈り、彼を崇拜している。わしらは彼を崇拜しているからこそ、その物語を語るのだ。永遠に彼の業績を伝えるために彼の本を出版するのだ。あんたたちがあれこれ尋ねるのも、「マナス」をしっかりと理解したいからだ。わしが思うに、「マナス」はますます長くなっても、短くなることはないだろう。それは千年あまりも吟唱されてきて、今後も続けられるだろう。

ア あなたが語る「マナス」は、あなたのお兄さんのバルバイの写本から学んだと言われましたね。

ジュ そうだね。

ア それらバルバイが記録した写本とあなたの吟唱する内容には違いがありますか？ もしもあるとすれば、どれほどですか？

ジュ 違いはある。ないとは言えん。彼（バルバイ）はマナスチのジュスパクンとサグンバイの口から「マナス」前半三部を記録し、これとの違いは大きくない¹⁶⁾ ¹⁷⁾。後半五部はウブライムという人の口から記録した。ウブライムの子孫はまだ健在だ。ウブライムの兄弟の子どもにはスライマン県長もいる。そのウブライムは文字を知らない人だ。彼は吟唱する時、ある部分は詩を用い、ある部分は散文を用いている。わしは歴史家でないから、叙事詩の中の歴史に対して手を加えることはできないし、わしは地理を学んだことはないから地名や山、川に対して変えようがなかった。わしがしたことはせいぜい散文の部分に詩に改めたことだ。わしが言う違いとはこのことだ。

ア あなたのお兄さんはジュスパクンとサグンバイの「マナス」を記録した時には詩で記録したのですね。

ジュ そうだ。

ア では、それらの詩とあなたの吟唱する詩とは違いがありますか？

ジュ 違っている。

ア どう違っているのですか？

ジュ 「マナス」は特に長いため、語る時に多くの詩行の位置が変わったり交替したりしてしまう。時にはいくつかのものが加えられたりする。かなりの部分が漏れたりもするだろう。ずっと増えるわけではない。君も知っているように、ある人は、キルギスはシャイク・マン

ルから発展したと言っている。これに対し、陶陽もわしに手紙を書いてよこした¹⁸⁾。その手紙を君にも見せてあげたい。子どもたちにも手紙の内容を読んでやった。陶陽が言うには、以前語ったことを改めて強調してくれということだ。キルギスだけでなく、母系時代にはどの民族も自分の父親を知らず、母系時代とは最も古い時代のことだ。ここまで言う、「マナス」をはっきりさせるのはとても難しい。わしらは父親がないとだめだと思えるが、他民族の学者はこのように言っている。彼は、どの民族もみな母系時代を経過し、父系時代は後に現れたものだと言っている。じつは「四十人の娘の物語」はその母系時代のことだ¹⁹⁾。

ア あなたが吟唱する「マナス」は全部で八部23万行あまりです。この数字を耳にした人はみな、あなたにはきっと特に優れた才能があると思い、あなたは神のご加護がある人だと言います。普通の人の脳の中にこのような豊富な世界が蓄えられているのが、その証明です。あなたの知恵と才能には、私たちは誰もふしぎに感じられます。人びとの中にはこのような言い伝えがあります。あなたは寝ている時に夢で神を見て、彼らはマナスの物語を食べ物にしてあなたの口の中に入れた。さらに、あなたは夢でマナス、バカイなどの人を見て、彼ら自身で「マナス」をあなたに教えてくれた。あなたは、このことをどう思いますか？

ジュ 君はこの質問を何度も尋ねたね。なにが起きたのか、ありのままに話したから、これまでにも隠していない。わしは兄のバルバイの写本で「マナス」を学んだ。今日はもう一度また話してやろう。

わしの父親がメッカへの巡礼からもどった時に、わしは11歳だった。それは夏のことで、わしは父母に「マナス」を読んで聞かせてい

ると、いつのまにか眠ってしまった。どんな夢の話をしたか自分では分からないが、その後わしは夢から目をさました。わしの父親はその時になにも言わず、母親に頼んで人に羊の群れから子羊を一頭引っ張ってきてもらい、それから近所の老人たちを招いて、彼らに祈ってもらった。その時、ママケという人が父に向かって言った。

「やあ、ママイよ。あんたは600頭の羊の中から400頭を売り払って費用にし、メッカに巡礼に行ってもどって来た。帰ってからも、羊を屠殺して客をもてなした。どうして今年また子羊を屠殺するのだね？　こんな屋間に、よそから来る客もいるまい？」

父は「わしは一生のあいだ苦心してきたのはこれら家畜だ。あんたらは祝福して、肉を食べてくれればいいのさ」と答えた。

客たちを送り出してから、家には父、母、兄のバルバイとわしの四人だけになった。そこで、父はわしに「坊や、おまえは今しがたどんな夢を見たのかね？」と尋ねた。わしは自分が見た夢を彼らに話した。

「時間は夕暮れで、女たちが外で乳しぼりをしていた。外に出ると、大きな馬に乗った人が家の近くにやって来るところだった。馬には鞍はなく、フェルトのパッキングがかけてあるだけだ。その人の顔色はやや黒かった。わしは近寄って彼の手綱をつかんだ。その人はわしに向かって『おまえにはあの人たちが見えるかね？』と訊いた。わしは彼が指さす方向を見ると、前方には馬に乗った人が3、4人いた。そこで、彼はまたこう言った。「あの前に立っているのがマナス、もう一人はバカイ、あれはアルマンベト、そのそばにいるのはチュバク、セルガクは後ろにいる。おれはウルチウールだ。おまえはしっかり彼らを覚えておけ」。そう言い終わ

ると、彼は遠ざかった」。

父は聞き終わると、「ああ、おまえの兄が叔父のマメレクの家に行った時も同じような夢を見た。それはちょうど彼が『マナス』に熱中している時期だ。マメレクも羊を一頭屠殺して人びとの祝福を受けてから、自分の夢を話し出した。それから彼は「マナス」を吟唱し始めたのだ」と言った。

父はまた続けてくり返しわしに言い聞かせた。「おまえはわしの息子だ。ひたすら「マナス」の語りを学んで、40歳になる前はできるだけ人びとの前で吟唱してはいけない。マナスは生きている神霊だ。おまえはまだ若く、しばしば自分を抑えきれず、軽率なことをすれば自分にとってめんどうなことになるだろう」。このため、わしは40歳以前には、たとえ吟唱できても、父の言いつけを守って人びとの前で語ることはしなかった。

しかし、一度だけ例外があった。それは1940年のことで、ベドル道路を施設する時に語ったことがある²⁰⁾。その時、こんなわけがあった。道路を造る時に、各地からたくさんの人が集められた。その中の二人は自分がマナスチだと言って、みんなが休んでいる時に、毎日くり返し「マナス」と同じような内容を吟唱した。人びとも聞きあきてしまった。その時、わしはボーザを少し飲みすぎて、その場で立ち上がって彼らは「マナス」を語れないと言った²¹⁾。この言葉を聞くと、その場にいた人はガヤガヤ騒ぎ出し、こう言った。「もしもあんたが語れるなら、みんなに聞かせてくれ」。みんなの強い希望で、わしは酒の勢いを借りて語り、語り出すと、七晩も続けて語った。工事現場から家にもどってからは、父の言いつけどおり、もう人びとに語るなかった。しかし、決して語らないというわけにはいかなかった。親戚や友

人の集まりでは、断るわけにはいかない。人びとの求めに応じて、彼らにマナスの物語を話したが、大声で吟唱することはなかった。語った大部分はカルマック人がマナスのスルコルゴン城を攻撃した一節だった。

ア マナスチは夢でマナスを見さえすれば、「マナス」を語れるのでしょうか？

ジュ 吟唱できるかどうか、わたしにははっきり分からない。夢の中でもわたしに吟唱しろと迫る人はいなかったな。わしが見た夢とはこんなものだ。

ア こんなに長い英雄叙事詩を、あなたはどうやって覚えているのですか？ それにはなにか秘訣がありますか？

ジュ どうして覚えているのか、わたし自身にもあまりはっきりしない。しかし、人びとが「語れ」と言う時、特に力を入れて語る時に、それ（叙事詩の筋）自身が目の前に現れ、（叙事詩の詩行が）口もとに現れるのだろう。

ア つまりスクリーンの前で映画を見るみたいにですか？

ジュ そうだ。映画のように、それらの場面がぼんやりと眼前に現れる。

ア 私たちがあなたの吟唱を聞いている時に、あるいはあなたの語った「マナス」を読んでいる時に、重複し、固定して変わらない詩行をたくさん見ることができます。これらの詩行はあなたが「マナス」を学んだり覚えたりするのに役に立つ働きをしますか？

ジュ そうとも。そのような詩行は確かに役に立っている。

ア あなたは8歳から「マナス」を習い始めて、その内容についてよくご存じです。では、あなたが「マナス」を習い覚えた当初は、一行ごとに暗誦したのですか、それとも物語の筋を覚えていただけなのですか？

ジュ わしは物語の内容を覚えてただけだ。それらの違うところはこのように現れたからだ。吟唱する時に、ある部分は増やし、ある部分は短くする。筋のある物語を「創編（創作し編集する）」（老人はここで無意識に“kuraxtirip（創編）”という言葉を使った）して吟唱する時、時には無意識にいくつかのものを増やし、時には詩行の位置を交換したりひっくり返ししたりする。それらは、決してあらかじめ配列したり、本を見ながら朗読するように固定して変わらないということはありません。口頭で吟唱する時、必ず変化するものだ。わしは物語の筋を追いながら吟唱するだけで、それらの詩句は自分でわしの口もとまで走ってくるのだ。

ア 単語の方面の変化だけですか？

ジュ そう、単語の面だ。

ア 物語の筋は変わらないのですか？

ジュ 変わらない。単語、押韻が変化する。

ア こんなに多くの詩行を、吟唱する時にあなたはどのように組織して配列するのですか？

ジュ 語る時にはそれらが自分でわしの口もとに走って来て、わしはひたすら口を開けて語るだけだ。

ア 「マナス」を吟唱する時に、あなたにとって最も語りやすい部分はどれですか？

ジュ わしにとって、べつに難しいとかやさしいとかという区別はなく、どれも同じだ。しかし、最初に始める時には、「マナス」（叙事詩の第一部）の数句を先ず吟唱し、それからその他の部分を語り始め、誰を語ってもすらすらとできるだろう。もしも「マナス」を先に吟唱しないと、口を開いてその他の部分を語ろうとしても、始める時にはかなりすらすらと語れないかもしれない。これがわし自身の体験だ。

ア 吟唱する過程で、あなたは一人の英雄、あるいは彼の駿馬か、あるいは他の事物を描く

必要がある時に、例えば英雄マナスまたはその駿馬アククラ描くと言う時、特定の、基本的に変わらない固定の単語と詩行があるのでしょうか？

ジュ そうだ。固定して不変の詩行があるし、変化する詩行もある。

ア では、どれが固定しているのですか、どれが変えられるのですか？

ジュ 固定しているのは彼らの名前、故郷の名称などだ。

ア 私たちはしばしば叙事詩の中で、次のような詩行に遭遇します。

「マナスの息子セメテイ、頭上にはミンクの皮の帽子をかぶっている」、「アククラの背に乗ってたいそう高く、まるでアラトー山のように聳え立っている」、「汗王の娘カニケイ」、「アクン汗の娘アイチュレク」。それらはどんな時にも現れていて、まるで固定して変わりません。他に、二人の英雄が闘う時には、いつも「……互いに必死に争い、疲れを知らずに斬り合う。互いの腕を引っ張りながら、槌が兜にぶつかる。盾はもう失われ、武器も持たなくても、英雄たちは勝負がつかない。……槌がガチャガチャと兜にぶつかり、矛と槍は胸あてにカタカタとあたり、耳をつんざくばかりで、英雄の声はわあわあと響く」など生き生きとした言葉の描写があります。

ジュ このような言葉は確かに多いね。特に人の名前と結びついた言葉は変わるはずがないだろう。

ア いくつか例をあげてもらえますか？

ジュ 例えば、マナスを描写する時は、次のような表現を用いる。

「蒼い鬣の狼マナスは、
まるで金と銀の、
最も精華の部分で作られるようだ。

まるで天と地のあいだで
天に聳える柱で作られているようだ
まるで太陽と月が
その体の輝きで作られているようだ
その土台の厚い大地だけが
彼を支えることができよう」

これらの詩行はどんな時でも変わらない。しかし、その具体的な事績を語る時には、具体的な状況によって変化する。例えば、彼を描写する「虎」、「豹」などの言葉はたえず変化する。わしは吟唱する時にも意識的に変えるわけではなく、吟唱の過程で、それら（これらの言葉）は自分で詩行の必要によって口もとまで来て、しかも（彼らの姿が）眼前に現れる。

ア あなたが吟唱する時、一人の英雄と彼らの駿馬に対して異なっているが固定した言葉を使って形容したり描写されたりしますね。

ジュ そうだ。どの英雄の名前、性格もすべて固定して不変だ。彼らの乗馬も変えることはないだろう。動作の面では誇張するところもある。しかし、すべての英雄をマナスやアルマンベトのように描写することはできない。適当な時になったら、私たちは彼らの弱点を語り、さらに彼らを死なせなければならない。もしもこうしなければ、人びとも喜ばないだろうし、信じるはずがない。

ア ある英雄を描かなければならない時、例えばアルマンベトが登場する時に、あなたは先ずなにを思いつきますか？

ジュ アルマンベトが登場する時には、先ず思いつくのは彼の英雄的な事績だ。

ア では、どう彼を描写するのですか？

ジュ 先ず彼の容貌を描かなければならない。例えば、「金色の容貌は四方に光輝き、真っ白な顔に斑点もなく、言葉は率直でしわが

なく、アゼズ汗の子アルマンベト」という表現によって彼の容貌を描写すると同時に、個別の言葉には変化あるいは増加もあるかもしれない。カニケイを吟唱する時には、「汗王の娘カニケイは、女の中の美人、長い髪の毛の者の達人、婦人の中の知恵者、広いスカートの中の純潔な者、女傑の中の王者」というような四行詩で十分だ。

ア これらの固定していて形容する言葉でそれぞれの人物の基本的な性格や特徴が表現されています。では、アイチュレクはどう描写するのですか？

ジュ アイチュレクを描写する時には、「天空を飛翔し、全身に金の光を塗りつけ、『彼女はたいそう美しく』、太陽と月は彼女に賛嘆の声をあげる」という詩句で彼女の美貌が、太陽と月さえも彼女に引きつけられ、及ばないことを恥じるとたたえる。もしもこう語らなければ、アイチュレクの美しさは表現できないだろう。

ア その他の英雄、バカイ、ギュルチョロなどにもこのように固定した描写の段落はありますか？

ジュ そうだ。固定した詩行で吟唱する。

ア これらの生き生きとして、固定した詩行は叙事詩を吟唱する時に、自分であなたの口もとに来るということですか？

ジュ それら自身でわしの口もとに走って来る。例えば、ある勇士が戦場に飛びこんで闘う時、以前に語ったことのある矛や槍についての詩行が口もとにやって来るだろう。

ア では、あなたが最初に（叙事詩を）語るのが学んだ時に、先ず覚えたのはこれら固定した詩句だったのですか？ それとも物語の内容ですか？

ジュ 先ず覚えたのは物語だった。

ア それから？

ジュ 開頭詞（冒頭の言葉）。

ア 開頭詞とは何ですか？

ジュ わしが言う「開頭詞」とは、マナス、アルマンベト、ケクチェ、ギュルチョロなどのような英雄の名前だ。彼らの中の誰か一人でもいつ出現しようと、これらの「開頭詞」は自然に口もとに来て物語を引き出せるだろう。

ア あなたはサグンバイの「マナス」を読んだことがありますか？

ジュ 読んだことがある。

ア あなたは彼の「マナス」をどう評価しますか？

ジュ わしがサグンバイの「マナス」をどう評価するのか？ わし自身はマナスチの一人として、彼に感謝すべきだろう

ア あなたの「マナス」とサグンバイの「マナス」にはどのような違いがありますか？

ジュ わし「マナス」とサグンバイの「マナス」を比較すると、アルマンベトがケチェックから離れてマナスに身を寄せる部分にはなにも違いはないが、サグンバイのテキストのこの部分は、わしのよりもかなり詳しく語られている。

ア あなたが言うのはどの部分ですか？

ジュ マナスはアルマンベトに上着を着せてやり、それから彼の着ている服を他の人にやる場面だ。わしはすでに出版した本に対して遺憾に思っている。どのような本も出版する以前にはくり返し何度も審査すべきだが、わしは自分で「マナス」を記録しても、もう一度読めなかった。

ア 以前、かなりのマナスチたちは文字を知らなかったけれども、彼らが吟唱した「マナス」はとても精彩がありました。例えば、私たちが聞いたのは、ジュスパクン・アパイ、ウブライム・アクンベクなどです²²⁾。ジュスパクン・ア

パイは文字を知らなかったけれども、彼はとても抜きでた技巧で「マナス」を語って、遠くまで知られていました。ある時、彼はキルギスタンから来たサグンバイとカラチで吟唱を競いました²³⁾。彼らの競争は伝説となって今日まで伝わっています。彼らは文字を知らなかったが、どうして「マナス」をあれほどすばらしく語ることができたのでしょうか？

ジュ それは、彼らが「マナス」の物語を非常によく知っていて、言語の表現能力が強かったからだ。吟唱をあのようすばらしくできるのは、主としてあのマナスチの口語表現能力、「マナス」の内容に対する理解能力によって、そのことを芸術的に表現し、生き生きと人びとに伝えることができるのと関係があると思う。

ア 1961年と1964年、あなたはひたすら吟唱して、他の人に記録させましたね。

ジュ そうだ。あの頃、わしは彼らに語るだけで、筆を動かして自分で記録することはなかった。

ア あなたは他人に語るのが好きですか？それとも自分で記録するのが好きですか？

ジュ わしと思うに、自分で記録すればより全面的であるかもしれない。もしも語れば、聴衆はいつも「昨日語ったのがもともとこうであり、今日はどうしてこれらの言葉を変えたのですか？昨日はこのような内容を語ったのに、今日はどうしてないのですか？」と質問し、わしの注意力が分散するだろう。

ア 「マナス」を吟唱する時、自分の感情のままに休まずに続けられるが、自分で記録する時には、まさか気分が損なわれないでしょう？

ジュ あり得ないな。

ア 自分で記録すると、叙事詩には吟唱する時のような激情や芸術性は失われないのでしょうか？

ジュ そんなことはない。なぜなら、語ってもよいし、自分で記録してもよいが、いずれも同じようなもので、自分で記録すればいくつかのものを落とさないだろう。

ジュ あなたが自分で記録する時、詩行、言語の芸術性に対し、ゆっくりと思考を重ね、もしも不満を感じれば改める機会もありますね。以前の天才的なマナスチたちは、口を開いて吟唱することを知っているだけで、しかも依然として叙事詩を語るのにきわめて精彩があり、聴衆の称賛を得ました。あなたもかつてこのようでした。あなたが「マナス」を記録すれば、それを固定化し、吟唱は多くの類似の吟唱の一度だけのものにすぎず、マナスチの吟唱の才能の新たな現れです。もしも今回語り終えなければ、もう一度吟唱を行い、吟唱の中で修正して完全なものにし、その芸術性をより一歩高めることができますね。おそらくこの点で、「マナス」はこの千年のあいだ口から耳に伝わる過程で一步步今日のような芸術の高峰に向かって歩んだのでしょう。もしも私たちがあなたに「マナス」をもう一度最初から最後まで語ってくださいとお願いし、テープレコーダーであなたの語るのをすべて記録したら、あなたがすでに出版された本とのあいだに違いがありますか？

ジュ 言語表現の面できつと違いがあるだろう。

ア それは、どう理解したらよいのでしょうか？

ジュ 物語の筋は変わらないだろうが、言葉では長くなったり短くなったりするかもしれない。口頭で吟唱する時には、ある部分は短くなるし、連続した吟唱の過程では、もしも語り方に感情がほとばしれば、芸術性を高めて、長くなるかもしれない。

ア あなたが吟唱する時、いつ最も気分が高まりますか？

ジュ わし自身で好み、最も興味を覚える、すばらしい英雄が登場する時、最も気分が高まるだろう。わし自身について言えば、自分で記録する時には、一人で静かに記録を行なうのが好きだし、吟唱する時には、わしの感情も高まり、一心に耳を傾ける多くの人の群れの中であるのが好きだ。それらの聴衆がますます一心に聞けば、ますます語り手の気分は高まるだろう。

ア あなたが「マナス」を吟唱する時に、聴衆はどのように聞いていたのですか？

ジュ 一般にはわしの吟唱を一心に聞くに違いない。一つの例をあげることができよう。1962年、当時のスレイマン県長がわしをカラブラクまで遣わし、そこでわしに記録者のために「マナス」を語らせた。ある日、マムベトカズ、オロザクン、スライマンなどの人たちがカラブラクまで行った。彼らの他には、蔡秘書という漢族の幹部もいた。彼らは、彼が自治州の秘書長だと言い、キルギス語の話し方もすばらしかった。彼らが行ったのは、統一戦線会議を招集するためだった。クズルクンバイズから北へ40人あまりを招集した²⁴⁾。最高会議の雰囲気のため、彼らは私に「マナス」を吟唱するように求めた。羊の肉と羊の尾の油をいっぱい食べて、夕方から語り始めて翌日の朝まで語った。その時、その蔡秘書はたいそう驚いた。彼の言葉は今も覚えている。

「私たちはいつも会議を開くと、会議の参加者はいつもちゃんと座らず、出たり入ったりして、タバコを吸って会議をする。私どもは昨日よりあなたの語る「マナス」を聞いて、一晩中誰も手洗いにも行かず、誰一人として眠らない。この「マナス」にはどんな魔力があるのでしょうか？ 私にはどうしても分かりませんが、

人びとがひたすら聞いているのにびっくりしました。あなたたちは確かにこの「マナス」を記録しなければなりませんよ」。

ア あなたは一人で静かに記録するのと、聴衆のあいだで彼らの激励によって吟唱するのでは、どちらがよいのでしょうか？

ジュ 聴衆のあいだで吟唱の方がずっとよいな。

ア では、一つ教えてください。私たちは「マナス」をどう記録したらよいでしょうか？

ジュ 自分一人で記録すれば、精力を集中できる。語りながら他人に記録させると、記録者は追いつかないでかなりいくつかのものを落としてしまう。しかも彼はくり返し質問し、語り手の邪魔をし、彼の気分を水をさす。

ア もしもそうであるなら、最もよい方法はあなたが聴衆のあいだで吟唱する時に、先ずテープレコーダーで記録し、それからまたテープレコーダーから書きとめればよいわけですね？

ジュ このようにすれば最もよいだろう。吟唱する時間はあまり長くてもだめだし、毎日4、5時間ほど語る。もしも語る時間が長すぎると、語り手の声はしゃがれて調子が外れてしまうだろう。

ア あなたの「マナス」18巻はもう出版されました。この18巻の中には漏れた部分、不満なところがありますか？

ジュ あるね。一例だけあげよう。「ケネニム」の中で、イスファーハンの勇士ケスレトは、ケネニムが故郷に連れもどってみんなの前で斬殺した。この部分は落とされている。わしが改めて読んだ時に不満な部分がたくさんあることに気がついた。

ア 「マナス」以外に、あなたは多くの英雄叙事詩を語られました。その中の多くはもう出

版されています。あなたが語られた、「エル・トゥシトゥク」、「クルマンベク」、「トルトイ」、「バグシ」、「女英雄サイカル」、「コパン」、「ママケとショボク」、「ジャングル・ムルザ」などの叙事詩は、あなたが写本から学んだのですか？ それとも他の人が吟唱する過程で覚えたのですか？

ジュ 「トルトイ」は、チョンバグシージョバサル部落の有名な狩人オサクの口から聞いたものだ。わしはかつて彼と4年も隣りどうしだった。その時、彼はいつもトルトイの事績をわしに話して聞かせてくれた。彼が話す内容は、いずれもわしの記憶の中に残っている。わしはそれらを詩歌に変えて謡い出したのだ。

ア 以前、あなたは聴衆の中で「マナス」以外の他の叙事詩を詠ったことがありますか？

ジュ なかった。その他の叙事詩を詠ったことはない。「マナス」を語っただけだ。

ア あなたは「マナス」以外の叙事詩の内容を聞いた時に、散文の物語を韻文に変えたということですね、そうでしょうか？

ジュ そうだ。

ア あなたは、聞いた伝説を詩に変えて語られました。では、もしも私があなたにこれまで聞いたことのない物語を話したら、すぐさま詠うことができますか？

ジュ できるとも。どうしてできないことがあるだろう。

ア どうしてできるのですか？

ジュ 物語をよく知りさえすれば、それを詩歌にして詠うのはやさしい。あんたはわしに面白い物語を見つけてくれても、わしはもう80歳すぎになり、詠えないけれども、それを詩に変えて書き出すことはできるぞ。

ア ありがとうございます。あなたはわが国のキルギス族の文化事業のために貢献され、

どのキルギス人もみんな感謝しています。今日、私はこんなにたくさんの質問をして、お疲れだったでしょう。どうかいつまでもお元気で。またお会いしましょう。

原 注

- 1) アーケン これは歌手の口から出まかせに出た名詞。現代キルギス語において「アーケン」の概念は即興で歌う普通の民間歌手を含み、大型の英雄叙事詩を吟唱できる歌手をも指している。現代キルギス語では、狭義と広義の二種の意味がある。広義では、口頭の形式によって即興で詩歌を作る民間歌手と書面の形式で韻文体の詩歌を創作する詩人を含んでいる。狭義にはそれら書面の詩人だけを指す。
- 2) アルマンベト、バカイ 叙事詩「マナス」第一部の主人公マナスの最も親密な仲間。ギュルチョロは叙事詩第二部「セメテイ」の主人公英雄セメテイの仲間。
- 3) オロズドゥ マナスの祖父。
- 4) カニケイ 英雄マナスの正式な妻。
- 5) アイチュレク セメテイの妻で、「カイブチャル」の人と仙女が生んだ子。白鳥の羽を着て空を飛びまわることができる。
- 6) チュバク マナス側近の親密な仲間。
- 7) ベイジン 英雄叙事詩「マナス」の中で契丹人の都。
- 8) キタイ 「マナス」の中では「契丹」を指し、キルギス族の主要な敵の一つ。
- 9) セイレク 英雄マナスの異母兄弟。
- 10) セルガク 英雄マナスの異母兄弟。
- 11) ジョモク キルギス語では英雄叙事詩「マナス」を指す。
- 12) ウルチウール マナスの勇士四十人の中の一人。
- 13) クルグルチャル マナスの勇士四十人の中の首領。
- 14) コングルバイ マナスの主な敵の一人。
- 15) エセンカン キタイ人の汗王。マナスの主な

- 敵の一人。
- 16) ジュスバクン・アパイ 新疆アクチ県の有名なマナスチ。
 - 17) サグンバイ キルギスタンの有名なマナスチ。
 - 18) 陶陽 1964年に中国民間文芸家協会によってクズルス・キルギス自治州に派遣され、「マナス」の採集活動に参加して組長に任ぜられ、「マナス」の翻訳と研究に対して多くの貢献をした。かつて民間文芸家協会秘書長を務め、現在は退職して北京に住んでいる。
 - 19) ここでは、ジュスプ・ママイが異なる時期に吟唱したテキストにおいて、「四十人の娘」と名づけられたキルギス族の起源神話に対し削除された状況について述べられている。ジュスプ・ママイによる最初の吟唱の中にはこの伝説があったが、この神話伝説のために、近隣の民族からキルギス族は自分の父親を知らないと嘲笑されてきた。このために、聴衆たちの提案と求めのもとづき、ジュスプ・ママイはそれ以後の吟唱ではこの伝説を叙事詩の中から削除し、別の伝説と取り換えた。
 - 20) ベドル アクチ県東北部山地の古代シルクロードの重要な道路の一つ。1940年に、新疆の盛世才は当時のソ連と協定を結び、道路の敷設を始めた。さまざまな原因から、この敷設は中止され、最終的には造られなかった。
 - 21) ボーザ キビで醸造したキルギス族の飲み物。
 - 22) ジュスバクン・アパイ ウブライム・アクンベク 新疆アクチ県の有名なマナスチ。ジュスプ・ママイの兄バルバイは前者から「マナス」の前半三部「マナス」、「セメテイ」、「セイテク」の内容を記録した。後者からは、「マナス」の後半五部「ケネニム」、「セイト」、「アスルパチャとベクパチャ」、「ソムビレク」、「チグテイ」の内容を記録した。
 - 23) 地元の老人とマナスチからの聞き取りによれば、1917年に戦乱のためキルギスタンの有名なマナスチであるサグンバイ・オロズバコフが避難民とアクチ県に逃れてきた。現地の金持ちと村長などの役人は「マナス」吟唱コンクールを開催し、キルギスタンから来たサグンバイ・オロズバコフとアクチ県のマナスチであるジュスバクン・アパイに叙事詩の吟唱を競わせた。阿地力・朱瑪吐爾地、托汗・依薩克著『〈瑪納斯〉演唱大師居素普・瑪瑪依評伝』（内蒙古大学出版社 2002年）第35-58頁 参照。
 - 24) クズルコンバイズ アクチ県スムタン郷クズルコンバイズ大隊を指す。